

平成 29 年度 F 工房活動報告書

1. 学生ファシリテータの養成

1-1. 学生ファシリテータ（学ファシ）の人数

	学ファシ					
	4 年次	3 年次	2 年次	継続者	新規	合計
第 7 期	13 名	15 名	33 名	26 名	35 名	61 名
第 8 期	7 名	20 名	31 名	24 名	34 名	58 名

※翌年度の年次で記載

第 8 期学ファシは、第 7 期と同様の人数規模を維持している。継続学ファシ・新規学ファシの人数比率については大きな変化が見られないものの、第 7 期に比べると 4 年次生の人数が減少している。

なお、第 8 期学ファシ 58 名のうち 6 名の学ファシが就職活動や部活動などとの両立が困難となったことを理由に活動の辞退を申し出た。さらに 2 名は研修期間中に連絡が取れなくなるなどして登録から除外する対応を取ったため、平成 30 年 3 月末日時点で 50 名の登録となっている（第 7 期も活動期間中に 4 名の辞退者が出ている）。

1-2. 第 7 期の活動

■ファシリテーション実践

	タイトル	日程・期間	概要
1	新入生向け 学部オリエンテーション への参画	平成 29 年 3 月～4 月	理学部、コンピュータ理工学部、外国語学部、文化学部、現代社会学部で開催されている新入生向けオリエンテーションプログラムの運営に携わった。
2	「自己発見と大学生活」 への参画	平成 29 年 4 月～7 月	学ファシが 28 クラスに分かれ、全 15 回の授業運営に携わった。担当教員とともに、アイスブレイクの運営や大学生活に関する話題提供グループワークの支援などを担った。

「自己発見と大学生活」（以下、「自己大」）期間中における学ファシ支援については、昨年度に引き続き、担当クラスを越えた意見交換の機会としてユニットミーティングを設定した。

■ふりかえり

第 7 期学ファシが、活動を通じて得られた学びや気づきを確かめることを目的に「学ファシふりかえりの集い」を実施した。今年度は、授業運営における最も身近な協働のパートナーである「自己大」担当教員から学ファシに対するフィードバックコメントを集め、学ファシに共有した。

1-3. 第8期の活動

■募集

	タイトル	日程	概要	参加者 合計
1	募集説明会	9月28日(木)、 29(金)、10月2日(月)	学ファシ応募希望者を対象に、学ファシ活動の概要や申込み方法等について説明した。	67名
2	学ファシによる体験& 相談会	10月3日(火)	継続学ファシの有志7名がプロジェクトチームを組み、学ファシ応募希望者の疑問を解消するための相談会企画を実施した。	6名

昨年度は合計7回実施していた募集説明会を今年度は3回に絞って開催したが、昨年度実績(59名)よりも多数の参加者を獲得することができ、34名の新規学ファシ申込みにつながった。「学ファシによる体験&相談会」は今年度初めての取り組みであり、コーディネータの呼びかけのもと集まった学ファシでチームを結成し、企画準備や当日の運営を担った。

■研修

	タイトル	日程	概要
1	新規活動者対象 オリエンテーション	10月24日(火)	新規学ファシを対象に、学ファシ活動の概要や、活動する上で必要なルール・注意点等を共有した。
2	継続者対象研修	11月6日(月)	継続学ファシを対象に、先輩としての心がまえを学ぶ機会を設けた。また、継続学ファシは研修合宿においてファシリテーションの基礎についての話題提供を担うこととし、ジグソー法を用いて準備を行った。
3	研修合宿	11月25日(土)、 26日(日)	学ファシ全員の顔合わせとファシリテーションの基礎を理解することを目的に合宿を行った。
4	ファシリテーション 勉強会	① 12月27日(水) ② 1月11日(木) ③ 1月15日(月) ※新規学ファシは1回以上参加(継続学ファシの参加は任意)	ファシリテーションについての視野を広げ、多様なファシリテータのモデルに出会うことを目的に、勉強会を実施した。 ① 授業現場における「介入」のありかたについて、ケーススタディで学ぶ(担当：F工房コーディネータ 鈴木陵) ② SDGs ワークショップを体験する(担当：総合生命科学部教授 佐藤賢一氏)

			③ 自身の学生生活をふりかえる（担当：第7期学ファシ）
5	「自己大」研修	① 2月13日（火） ② 3月19日（月） ③ 3月20日（火）	「自己大」の教育目標および学ファシの役割理解を目的に、3回の研修を実施した。 ① 大学生水準のポスターセッションを体験する ② 「自己大」の概要を理解する、スケジュール確認等 ③ 授業プログラムを実際に運営する

第7期の学ファシ研修は、平日の日中に開催する連続講座という形態を取ったことから、1) 授業と重複するため欠席率が高い、2) 1) によって学ファシ同士の関係性が構築されにくいなどの課題があった。また、「自己大」担当教員の一部からは継続学ファシと新規学ファシの協力関係の不十分さが指摘された。

そのため今年度は、1) 学ファシとして必要な知識・ノウハウを研修合宿で集中的に学び、学ファシ同士のネットワークを形成する、2) 意欲のある学ファシがさらに学びを深める機会として勉強会を設定する、3) 継続者対象研修を実施し、後輩学ファシ育成に関する意識向上を図る、といった研修設計の変更をおこなった。

これらの取組の結果、学ファシ同士のネットワーク形成はある程度達成されたと考えられる。今後は、合宿プログラムを引き続き実施しつつ、特に継続学ファシの主体性を引き出し、活動への向上心をさらに高めるような工夫を検討したい。

なお、「自己大」において学ファシが担うポスター発表の質向上を図るため、科目の担当教員の協力を得て「自己大」研修機会を2回から3回に増加した。この変更に伴う影響を検証したうえで、次年度の学ファシ研修の教育目標については科目の担当教員と共に改めて検討したい。

2. FDに関する取組み

2-1.授業の見学

公開授業&ワークショップ 3件（経済学部1件、現代社会学部1件、文化学部1件）

平成28年度に発行した「改訂版 アクティブラーニング・パッケージ」は、2年に1回の発行とした。今年度は3件の授業見学を行ったものの学内へのノウハウ発信と関連づけることが十分にできていない。これまでに実施してきた授業見学や、授業実践に関するノウハウ収集の実績を今後どのように活かしていくかについては、引き続き検討したい。

3. コンサルティング

■ 依頼件数：16件（依頼者内訳：教員9件、職員7件、学生0件）

1) 学内他部門との協働

①各学部

新入生オリエンテーション 6件（現代社会学部*、外国語学部、文化学部、
（2017年度入学生対象） 理学部、コンピュータ理工学部）

※KSU生の入学前スクーリング1件を含む

2) 授業の支援

①共通教育科目

キャリア形成支援教育科目	2 件（自己発見と大学生活、キャリア・Re-デザイン）
人間科学教育科目	2 件（熊本・山鹿フィールド、大学の歴史と京都産業大学）

②学部専門科目

法学部	2 件（法学部演習、法教育演習Ⅰ）
-----	-------------------

④ 学部初年次科目

経済学部	1 件（3 セメ基礎セミナー）
------	-----------------

3) 課外活動の支援

2 件（文化学部オープンキャンパス学生プロジェクト振り返り会、追分寮・葵寮 新班長研修プログラム）

4) その他

1 件（GSC 学生リーダー会×GSC 教員意見交換会）

今年度は、F 工房が複数年度支援を行っている法学部の SA 養成科目「法教育演習Ⅰ」に加え、共通教育科目「熊本・山鹿フィールド」における授業サポーター育成の依頼を新たに受けたほか、現代社会学部における高大接続授業の補助員募集にも協力した（※1）。これらの例はいずれも、教育プログラムの運営に携わる学生の育成・派遣に関する依頼であり、こうした趣旨の依頼は昨年度に比べて増加傾向にあることから、授業に参画する学生の育成ニーズが高まっているものと推察される。

また、過去に初年次向け演習科目へのグループワーク導入支援を行っていた文化学部の教員から「情報カードゲーム」（※2）の貸し出し希望があった。今年度は当該科目への直接的な支援を行っておらず、ある程度ノウハウが定着したと考えられる。

なお、学生からの依頼件数は昨年度の 6 件から大きく減少した。複数年度にわたり F 工房が支援していた学生グループが自力でプログラムを運営できるようになったことからノウハウの定着が進んでいるともいえるが、F 工房が学生も活用できる学内資源であることを学生に周知する機会が必要ではないかと考える。

※1：授業補助員の募集は、コンサルティング件数に未計上。

※2：情報の書かれたカードを用いて 30 分～60 分程度でおこなう問題解決実習。

4. 学外での発表・講演

2017 年 9 月 26 日（火）

「第 5 回はればれ音楽プログラム研修会」での講演およびワークショップ

2017 年 12 月 25 日（月）

広島工業大学「平成 29 年度全学 FD」での講演

2018 年 3 月 4 日（日）

大学コンソーシアム京都 第 23 回 FD フォーラム 第 1 分科会での報告およびポスターセッション発表

今年度は、学外において 3 件の事例報告・研修プログラムの提供を行った。いずれの機会においても、学外に F 工房の取組を発信するだけでなく、発表内容を準備する過程において F 工房の取組を見つめ直し、ノウハウを整理する機会となった。特に、コーディネータ 2 名が第 1 分科会に登壇した「第 23 回 FD フォーラム」では、指定討論者の山田剛史准教授（京都大学高等教育研究開発推進センター）か

ら示唆深いコメントを多数頂戴し、改めて本学のF工房の取組の特徴を客観的に捉える機会となった。また、同フォーラムでは、昨年度に引き続いて学ファシが主体となってポスター発表に参加した。来場者からは発表者の学ファシが活動に参画した動機や学ファシ養成の仕組みなどについて多くの質問が寄せられ、関心を集めた。また、学ファシは発表後のふりかえりの場で来年度の発表テーマのアイデアを出し合うなど、活動へのモチベーションが向上している様子が見られた。

5. 学外への調査

実績なし

6. その他（F工房スペースの運用）

平成29年4月より、F工房スタッフが教育支援研究開発センター事務室に常駐することになった。1号館1階のF工房スペースは、ファシリテーションに関するミーティングスペースとして引き続き運用し、主に学ファシが「自己発見と大学生活」の担当クラスミーティング、担当クラスを越えて意見交換するユニットミーティング、スタッフへの相談、プロジェクトチームのミーティング等でF工房スペースを利用したほか、F工房が依頼を受けたコンサルティング案件の打ち合わせや情報共有の場として活用した（春学期ののべ来室者数は514名）。F工房スタッフは学ファシの活動支援を行うため、春学期授業期間中の昼休みにF工房スペースに在室し、「自己発見と大学生活」に参画する学ファシの相談対応・状況把握にあたった。

なお、スタッフが10号館1階に移動したことで、学ファシの活動意欲への影響が懸念される。「自己大」担当教員からは「学ファシは他の学生プロジェクトチームと異なり、ボランティアであることや活動内容が定型化しづらいことから、活動に不安や困難を抱えた際に気軽に相談し合える環境が必要」との意見を受けており、複数の学ファシからも「気軽に訪問しづらくなった」という声が上がっている。学ファシが気軽に立ち寄ることができ、相互の相談やノウハウの共有を通じて活動への意欲を維持・向上できる環境整備については、今後の課題としたい。

以上